

## 『&lt;一人前&gt;と戦後社会』 禹宗杭・沼尻晃伸

岩波新書／2024年3月／1,166円(税込)

副題には「対等を求めて」とある。他者と対等な関係に立つために、つまりは「一人前」「人並み」として認めてもらうために、個々がひたすら努力を重ねたことによって豊かな経済社会を築き上げた日本の近現代史を、前史としての戦前も含めて概観する。さらに、その延長線上にある現在の日本は、自己責任が強く求められて「一人前」であること自体が難しくなり、多くの人が生きづらさを抱えて生きる社会へと陥ってしまっていると位置付けられている。

## 『ジェンダー史10講』 姫岡とし子

岩波新書／2024年2月／1,056円(税込)

今やジェンダー論は実に多面的かつ多層的に様々な立場から語られるようになってきているが、本書は10のテーマに即して、女性史学の展開を背景とするジェンダー史研究の誕生から今日までの飛躍的發展の軌跡をたどる。ジェンダーという新たな視点から従来の歴史学を刷新し、歴史の見方を大きく転換させる契機になったことが丁寧に跡付けられている。

## チョコレートを食べたことがないカカオ農園の子どもにきみはチョコレートをあげるか？ 木下理仁

旬報社／2024年5月／1,870円(税込)

明確な答えのない問いに向かう力が、昨今の教育現場では求められている。本書は、途上国への支援や援助といった先進国目線のトピックに対し、多面的・多角的な考え方を提供してくれている。チョコレートを食べたことがないアフリカの子どもたちにチョコレートをあげるべきか否か、どちらの答えにも一理ある。どちらが正しいかではなく、何を考えて行動するかが重要である。第3章で作者とルワンダで義足を作っている方との対談が掲載されているが、そこで対談相手が「チョコをあげる、あげない以前の問題で、アフリカでは『働かざるもの食うべからず』という考え方が根本にあり、子どもであっても働くということが必ずしも悪いことだと思っていないという考え方もある。子どもが働いているからかわいそう、だからチョコをあげようという意識は、むしろアフリカの人々をばかにしていると考えてしまう」というコメントが非常に印象的であった。

## 『軍事力で平和は守れるのか—歴史から考える』

南塚信吾・油井大三郎・木畑洋一・山田朗

岩波書店／2023年8月／2,530円(税込)

ウクライナとロシアの戦争は長期化し、ガザ地区へのイスラエルの軍事侵攻も泥沼化した。最近のニュースを見ると、戦争が現前としてあることを以前より痛感させられる。それはなぜだろう。第二次世界大戦後の日本は戦争に加わることはなかったが、世界中では中・小規模の地域紛争や内戦、民族・宗教間の対立による軍事衝突が起きていた。そもそも戦争は繰り返されていたと言える。国際紛争の平和的解決をめざした国際連合が発足したにもかかわらず、である。今一度私たちは、なぜ戦争が起きるのかを探究するため、近現代の戦争の特質を振り返ってみる必要があるだろう。また、ウクライナ戦争についても、それがなぜ起きたのか、国際関係の中でとらえなおしてみると意外な一面が見えるかもしれない。今は平和を享受している日本のおかれた状況を、授業をつうじて生徒と考えるよい教材として薦めたい。

## 『「モディ化」するインド—大国幻想が生み出した権威主義』 湊一樹

中公選書／2024年5月／1,910円(税込)

2024年6月の総選挙により、モディ首相は3期目となったものの与党のインド人民党は議席数を大きく減らした。本書はそれ以前に書かれたものであるが、文章の読みやすさも手伝って、多くの示唆が与えられる。モディ首相は、就任以前から経済が好調なのに、自分の手柄だと主張する。タタ自動車などの大企業を優遇する一方、新型コロナより以前に、すでに貧困層は大きな打撃を受けていた。それでもモディは人気があった。それはヒन्दゥー至上主義を明確にしてムスリムを敵対視したり、エリート層を批判のターゲットにしたりといった政策によるものだった。高額紙幣廃止のような、反対者が多くでるような政策はトップダウンで決めた。新型コロナの全土封鎖も突然だった。まるでモディのワンマンショーだが、著者はモディが「モディ首相」を演じているという点でもワンマンショーだと指摘する。演技のための隠蔽や歴史修正が多々見られる。